2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第1次選抜）小論文　問題用紙（1/6）

2023年9月29日

※解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　名

文章（A），（B）を読み，設問に答えなさい。

（A）

哲学者ビョンチョル・ハンの著作『疲労社会』によれば，21世紀という時代の病はウィルスではなく，うつ病や燃え尽き症のような精神疾患であり，その背景にあるのが「疲労社会」としての現代社会であるという。しかし，この本が出版されてから10年，皮肉にも私たちはウィルスの脅威と戦っている。

では，この本の時代診断がまったく見当違いだったのかといえば，そうともいえない。コロナ禍のなか，私たちはウィルスの感染だけでなく，うつ病や燃え尽きといった精神の疲労と不調にも悩まされている。小中学校では行事が軒並み中止となり，子どもたちはマスクとソーシャル・ディスタンスによって行動を制限されている。そして休校の遅れを取り戻すため教科の学習が詰め込まれ，子どもたちは大きなストレスを抱えている。学生たちは大学に通えず，独りパソコンの前で授業を受け続けている。やっと教室での授業が始まったかと思うと，1，2週間ほどで緊急事態宣言が再発出される，ということの繰り返しのなかで，やはり大きなストレスを抱えている。　（略）

コロナ禍で，私たちは苛立(いらだ)ち，不安を感じ，そして倦(う)み疲れている。だが，その疲労をお互いに理解し合うのは容易ではない。健康に不安を抱える人，経済的な損失を被っている人，育児や介護を担当している人，あるいは学生のように何の問題もないのに社会から隔離されてしまう人。お互いの立場があまりにも異なることで，私たちは相手の状況を十分に理解することも，それを十分に思いやることもできないでいる。インターネットでは，「敵」探しが活発に行われている。「感染者数ばかりを大げさに報道するマスメディア」，「感染患者受け入れに消極的な医療機関」，「営業を自粛しない飲食店」，「学生の気持ちを考えず，いつまでもオンライン授業を続ける大学」，「無責任に外で飲んで大騒ぎする学生たち」，「自分たちのワクチンのことしか考えない高齢者たち」。そうやって，私たちは次々に「敵」を見つけ出してきたが，それによって事態は好転するどころか，社会の分断と不和がますます大きくなるばかりである。

残念ながら，21世紀もウィルスの時代が続いている。私たちは，その真っ只中で苦しんでいる。しかし，著者のハンが主張するように，免疫学的な思考，つまり社会を自己と他者，内部と外部，友と敵に区別して理解しようとする物の見方は限界を迎えている。たしかにコロナ・ウィルス自体に対しては，ワクチンという免疫学の技術が依然として有効である。しかしコロナ禍における疲労と不和に対しては，友と敵を区別する免疫学的な思考法が有効であるとは思えない。

（略）

ハンによれば，私たちが生きる現代社会は，「能力社会」であるという。近代の「規律社会」は (1)「禁止，命令，規則」のテクノロジーによって，別言すれば「～してはならない」という否定性によって，人々を社会に従順な主体へと仕立てていった。しかし，現代の新自由主義は，規制緩和の名のもと，そうした禁止の否定性を次々に撤廃していく。いまや禁止の否定性ではなく，「計画，自発性，動機づけ」といった肯定の力によって，人々は能力の主体となる。そして，私たちは誰かに強いられることなく，みずからの能力を自由に発揮できる

2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第1次選抜）小論文　問題用紙（2/6）

2023年9月29日

※解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　名

ようになる。

ところが，現実の私たちは，みずからの能力を絶えず発揮し，成果を求めて活動し続けねばならないというプレッシャーに苛(さいな)まれている。他者からの強制ではなく自由によって，私たちは自分自身と競争を続け，自分自身から搾取を続けているのだと，ハンは語る。人々は終わりのない自己搾取のなかで疲弊し，おしまいには燃え尽き症やうつ病といった精神疾患を患(わずら)う。だから新自由主義が体現する「能力社会」は，「疲労社会」に他ならないのだという。

絶えず能力を発揮し，成果を求めて活動し続けるなかで，人々は疲弊する。だが，それとは反対に，活動せず能力を発揮しないこと，すなわち無為とは，必ずしも能力のない無能を指し示すわけではない。無為とは，能力があるのにそれを現実化せずにいられること，つまり「～しないことができる」というより高次の能力を意味することもある。

（略）

「能力社会」の命法に対して，現代の私たちに必要なのは (2)無為の命法ではないだろうか。ただし，こんにちの日本社会の現状からすると，この命法は個人の心構えとしてでなく，社会的な要求として実現されるべきであろう。「サービス残業」や「過労死」という言葉が使われるようになって久しいが，日本の労働状況は構造化されたものであって，個人の心構えでなんとかできるものではない。

（略）

「改革」の名のもと，契約社員・派遣社員や業務委託といった「新しい働き方」は増加傾向にあるが，それらは労働法による規制を実質的に緩和していく。「新しい働き方」はどれも，働くことの自由や自発性を約束してくれるが，それによって，私たちは新たな不安を抱え込んでいる。「休んでいては，仕事がこなせない」，「成果を出さなければ，次の契約はないかもしれない」，「雇用保険・社会保険の蚊帳の外で，休むことはできても，経済的に立ちいかない」，といった不安である。そして直接的な強制も規制もないのに，ないからこそ，私たちは活動し働き続けることへと追い込まれてしまう。

（横山陸「訳者あとがきに代えて　コロナ・ウィルスと疲労社会」，ビョンチョル・ハン『疲労社会』花伝社，2021年，一部改変。）

2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第1次選抜）小論文　問題用紙（3/6）

2023年9月29日

※解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　名

(B)

パンデミックに対する世界各国の対応，そしてアフターコロナの時代に何が起きるかを想像してみれば，近代を支えてきた個人の自由と人権の不可侵性という思想が (3)感染症予防という大義の前に大きく揺らいでしまったことに疑いの余地はない。　（略）

哲学者ミシェル・フーコーの近代論（権力論）は，合理性や法律や人権という近代の歴史の語り方を相対化して，人間の身体や生命やそれらを対象とする医学などの具体的な社会制度に着目することにより，西洋を起源とする近代に対する歴史的理解に変革をもたらした思想として評価できる。

（略）

フーコーの権力論としては，「一望監視装置（パノプティコン）」がよく知られている。それは，字義通りの意味としては18世紀に哲学者ジェレミー・ベンタムによって発案された近代的な監獄システムのことだ。中心にある監視者の周囲に多数の独房を配置し，監視塔のなかの監視員は独房からは見えないままに，すべての独房のなかを見ることができる仕組みである。暴力によって強制しなくても，人びとは監視されているかどうかわからない不安のなかで，「自発的」に権力に対して従順に服従させられるという巧妙で効率的な仕掛けだ。

フーコーは，ベンタムのパノプティコンを，暴力という野蛮を最低限にしながら多くの人びとを効率的に服従させる装置の原型として扱っている。たしかに，近代社会では，多人数を画一的かつ効率的に扱う社会制度——学校や職場や軍隊など——が必須であり，そこでの秩序の維持には，暴力による強制ではなく，監視を通じた自発的服従が大きな役割を果たしている。　（略）　フーコーは，パノプティコンと結びついたこのタイプの権力が人びとの反抗の芽を事前に摘み取って従順に飼いならすという側面に着目して，これを規律訓練型の権力とも言い換えている。

（略）

だが，この監獄に由来するパノプティコンは窮屈な仕組みであって，監視する側はともかくも監視される側は諸手を挙げて歓迎するわけではない。そのため，受刑者を強制収容している監獄では取り入れられても，人びとの同意を得ながら社会全体に広がっていくことは容易ではない。そこで，パノプティコンを社会全体に拡げて推進していく梃子（てこ）となったのが社会の無秩序状態に対する恐怖だった。その背景にあったのは，放置すると無秩序やパニックを生み出すペストという古くからの強迫観念である。いわば，社会の行く末はパノプティコンか野蛮か，どちらかを選べという究極の選択だ。

そして，この規律訓練型の権力を念頭に置けば，ペストでの都市封鎖は秩序を行き渡らせる理想的なモデルとして機能しているとわかるだろう。それを実現可能としていたのは遍在する監視のもつ規律調教の力であり，人びとはペストへの恐怖からそれに従っていたのだ。

（略）

ここまで紹介してきたパノプティコンは，個人を対象として働きかけるミクロな性質の規律訓練型の権力が監視を通じて作動するというモデルだった。フーコーは後に，これを法や人権の主体としての人間ではなく，生きている人間の生命それ自体に関心を向ける統治のあり方として理論化しなおし，「生政治」や「生権力」

2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第1次選抜）小論文　問題用紙（4/6）

2023年9月29日

※解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　名

の一側面として論じるようになる。そのとき，彼は，個人的身体を対象とする規律訓練型の権力という軸と対比し，人間の集合的身体つまり人間集団や人口全体についての知識や管理という生政治（生権力）のもう一つの軸に対して注意を向けている。

（略）

ここで想定されているのは，人間を，それぞれ個別の顔貌をもった個人として扱うのではなく，モノのように匿名化して積み重ね，数え上げて人口集団つまりはマス（多数）として扱う手法だ。　（略）　その起源は，近代の中央集権国家が，その官僚機構を通じて，徴税や徴兵に必要な人口や所得や健康状態など多様なデータを収集し，国力として客観化し，それを増強するために努力し続けてきたことにある。それらがもとになって生まれたのが統計学や社会学など集団としての人間に関わる学問体系であり，そうした知識に基づいた公衆衛生的な地域や人びとへの介入だ。

（略）

人口つまり集合的身体を対象とする公衆衛生的な医療介入において重要なのは，個々人としての病者の治癒はそれ自身として目標にはされないということだ。　（略）　人口の生政治という点からは，「感染源」とみなされた感染者を隔離・検疫して「社会防衛」することが目的となる。そのとき，個人の幸福や健康という価値は，かけがえのない質的なものとしてではなく計算可能な数値として扱われ，ある生政治的な介入によって集団の得る合計としての価値と個人の得る価値や損害の間で比較が行われている。その上で，個人の自由と人権という価値を犠牲にして，社会を防衛することが目指されているわけだ。そこには必ず，どんな形であれ，こうした (4)功利主義的な計算が背後に控えている。

もう一つ重要な点は，この生政治においては，個人の治癒という目標に代わって，社会における予防が目標とされている点である。つまり，介入の対象となるのは隔離・検疫されるべき感染者だけには限られない。健康な人びともまた，社会防衛という同じ一つの目的のために，感染を予防する生き方，さらに一般的には健康増進のための生活習慣に従うことを求められることになる。

（略）

こうした生政治に加えてコロナ禍が示しつつあるのは，情報技術に基づいた身体情報の監視としての生政治とでもいうべきものの上昇である。

（略）

コロナ禍での閉じ込めがフーコーの示した事例と異なるのは，マイノリティに対する強制的排除としての閉じ込めではなく，マジョリティの人びとが同意し協力するなかで自らを閉じ込める実践だった点にある。これが可能となったのは，閉じ込めが，閉じ込められた人びとを孤独にする社会的排除とはなっていなかったからだ。それは，情報通信技術によって成立したインターネット社会でのコミュニケーションが，閉じ込め期間中も滞りなく保たれていたことによる。なお，ここでいうインターネット社会には，電子情報のやりとりによるコミュニケーションだけでなく，(5) 在宅での労働を可能にするテレワークや宅配での購買や消費のインフラも含めている。

2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第1次選抜）小論文　問題用紙（5/6）

2023年9月29日

※ 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　名

（略）

こうしたことのすべてを理解し分析するには，20世紀的な監視のモデルであったパノプティコンという枠組みは不十分だ。　（略）　パノプティコンは，監視されることに非協力的な人びとに対して効率的に監視を押し付ける方法として構想されていた。これに対してコロナ禍での非常事態における閉じ込めは，生命を守るという生政治的な大義の下で行われ，監視される側の人びとの協力と同意を前提としている。この場合の電子的な監視において，扇の要（かなめ）となるのは，個人が肌身離さず持つことの多いモバイル端末，とりわけスマートフォンだ。そして，監視の対象となるのは，個人の身体そのものではなく，原則としては匿名化された部分的な身体情報――どこにいたか，誰と接触したか，どこで買い物をし，交通機関をどう使ったか，など――だ。

（略）

たとえば，ニューヨークタイムズの記事（2020年3月1日）によれば，中国では感染拡大がまだ持続していた2月から，決済サービスのアリペイを介した健康コードシステムの大規模な社会実験を開始しているという。そのアプリに個人情報を入力すると，ビッグデータ解析を利用して，赤・黄・緑のQRコードが生成され，緑であれば行動制限はないが，黄は1週間，赤は2週間の隔離を要請される。

（略）

この (6)モニタリング監視の特徴は，監視されている人びと自身の協力に基づいて，「正しい」行動をしていることを可視化して評価する点にある。しかも，本人にフィードバックする評価は，監視という脅しとしてだけ機能するのではない。むしろ，緑になったり，緑を維持し続けたりすることへの動機づけを生み出して人びとを誘惑する点にこそ，新しさがある。

（略）

私たちは容易に，このアプリがSNSと連携するようになり，公衆衛生に積極的に協力することに対する「いいね！」評価を生み出す状況を想像できる。さらにそこから，そのアプリ履歴が個人の公共性の高さの指標となって，個人の信用スコアのような格付けにも影響する未来はもうすぐだ。

（美馬達哉『感染症社会　アフターコロナの生政治』人文書院，2020年，一部改変。）

2024年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜（第１次選抜）小論文　問題用紙（6/6）

2023年9月29日

※解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏　　名

問1

文章（A）の下線部（1）の「『禁止，命令，規則』のテクノロジー」に相当する表現を，文章（B）から7字で抜き出して答えなさい。　（10点）

問2

文章（A）の下線部（2）の「無為の命法」とはどのようなことを命じたものであると考えられるか，文章（A）の内容を参照して20字程度で述べなさい。　（15点）

問3

文章（B）の下線部（3）の「感染症予防という大義」とは，「生政治」の観点から見た場合，具体的にどのようなことを目的としたものであるか，文章（B）の内容を参照して30字以上40字以内で述べなさい。　（15点）

問4

文章（B）の下線部（4）の「功利主義的な計算」とはどのようなことか，文章（B）の内容を参照して60字程度で述べなさい。　（10点）

問5

文章（B）の下線部（6）の「モニタリング監視」と，文章（A）で述べられている「疲労社会」に共通すると考えられる点は何か。文章（A）及び文章（B）の内容を参考にして，200字以上250字以内で論じなさい。　（20点）

問6

文章（A）で述べられている「新しい働き方」において，文章（B）の下線部（5）の「在宅での労働を可能にするテレワーク」が採用された場合に，それが「疲労社会」の傾向を助長し得ると考えられるとすれば，その理由は何か。文章（A）の内容を参考にして，200字以上250字以内で論じなさい。　（30点）